

子どもの遊びと友人観

— 小学生の場合 —

Children's Plays and Friend Views:
In the Case of Elementary School Students

横 山 卓*

Takashi Yokoyama

要約

本研究は、子どもの友人観の今日的様相を遊びとの関連から明らかにすることを目的としている。都市化社会の今日、子どもの友人関係の希薄化が指摘されるなか、その実態解明を目指した調査研究がこれまで数多くなされてきたが、友人関係の質的側面は等閑にされてきた。そこで、本研究では子どもの友人関係の質的側面、すなわち①認識、②態度、③評価と欲求に着目して、これを「友人観」として捉え、その実態把握を試みた。その際、友人観は日常的な遊びの形態によって異なると考えられたので、子どもを「集団的活動的遊びをしている子ども」、「集団的非活動的遊びをしている子ども」、「非集団的遊びをしている子ども」の3タイプに類型化し、友人観の差異を検討した。結果、全体的には肯定的な友人観を有しているが、タイプ別に見ると、集団的遊びをしている子どもほど、なかでも活動的遊びをしている子どもほど、友人観は肯定的であった。

キーワード：子ども、遊び、友人関係、友人観

* 児童福祉学専攻

目 次

- I 問題とアプローチ
- II 調査の概略と分析方法
- III 調査結果の分析
 - 1 友人関係に対する認識
 - 2 友人関係に対する態度
 - 3 友人関係に対する評価・欲求
- IV 要約と結論

I 問題とアプローチ

本研究の目的は、子どもの友人観の今日的様相を遊びとの関連から明らかにすることにある。

子どもは、児童期に入ると、家族の枠を超えて友人関係を取り結ぶようになるが、この時点で、子どもも友人もそれぞれの家族で社会化されてきているので、互いに異なった思考・行動様式を身につけている。したがって、ときに互いの自己主張が衝突し、両者の間に緊張や葛藤、対立が生じるが、このことは子どもの社会化にとって非常に重要な意味をもつ。すなわち、自分の言動を友人に真っ向から否定されるという経験によって、子どもは、友人が自分とは異なる思考・行動様式をもつ独自の存在であることを知るのであり、ここで初めて自分の思いどおりにはならない「他人」の存在を知るのである。そして、この他人性の経験を通して、子どもは他人の存在を認め、他人の権利を承認するようになり、そのことによって自己を相対化し、自己中心性から脱却していくのである⁽¹⁾。

ところが、都市化社会における今日、こうした子どもの友人関係が希薄化しているといわれている。もしそうであるならば、他人性を経験する機会が失われているという点で、子どもの社会化にとってはきわめて重要な問題であろう。そこで、子どもの友人関係の今日的様相を解明すべく、これまで多くの調査研究がなされてきたが、これら先行する調査研究ではもっぱら友人数や接触頻度といった、いわば友人関係の量的側面に焦点が当てられており、その一方で、認識や態度といった質的側面は等閑にされてきた。

そこで、本研究では、友人関係の質的側面に焦点を当てて、その様相を明らかにしていくが、具体的には、友人関係に対する認識、態度、そして評価・欲求の3つの側面を取り上げ、これらを子どもの有する「友人観」として捉えた。そして、こうした友人観も決して一様ではなく、日常的に子どもが行っている遊びの形態によって異なってくると考えられる。というのも、友人観は友人との相互作用を通して形成されていくが、子どもの場合、友人との相互作用はもっぱら遊びの形をとるからである。すなわち、日頃、友人と集

团的遊びをしている子どもとそうでない子ども（＝非集团的遊びをしている子ども）とでは、友人観の様相は異なるのではないだろうか。さらに、同じ集团的遊びをしている子どもであっても、ある特定の遊びの遂行を目的とするような、いわば活動的遊びをしている子どもと、友人との交流それ自体を目的とするような非活動的遊びをしている子どもとではまた友人観が異なってくるのではないだろうか⁽²⁾。

こういうわけで、本研究では、子どもの友人観の今日の様相を遊びとの関連から明らかにしようとしたのである。

II 調査の概略と分析方法

上記の分析課題を解明すべく、小学4年生、小学6年生、中学2年生を調査対象とし、学校の協力を得ての留置調査を実施した。調査対象校の選定にあたっては、北海道・東北を除く全地域から地方別、市部・郡部別に小学校26校、中学校26校をそれぞれ抽出し、調査協力依頼文と調査票を各学校宛に送付した。結果、小学校14校、中学校17校の協力を得ることができた。調査期間は、2000年（平成12年）の9月～12月である。有効回収票数および回収率は、小学4年生が687票（89.2%）、小学6年生が875票（97.0%）、中学2年生が1078票（78.7%）、そして全体が2642票（86.9%）であった⁽³⁾。なお、本研究では、小学4年生および小学6年生を分析の対象としているが、それは、これら小学校高学年がいわゆる児童期の段階にあたり、豊富な友人関係を形成して活発に活動する時期だからである。

さて、こうした調査から得られたデータをもとに分析していくわけだが、分析軸となる遊びの項目には「あなたは、いま、どんな遊びをしていますか」との質問項目を取り上げた。その回答項目は次のとおりである。

Q あなたは、いま、どんな遊びをしていますか

- 1 野球、サッカー、バレーボールのように友だち⁽⁴⁾と一緒にするスポーツ的な遊び
- 2 友だちとおしゃべりをしたり、ゲームをしたりするような遊び。友だちと何となくぶらぶらしている
- 3 ローラースケートのように自分一人でもできる家の外での遊び
- 4 テレビゲームのように自分一人でもできる家の中での遊び
- 5 遊んでいない

回答項目1～4はそれぞれ、1＝集团的活動的遊び、2＝集团的非活動的遊び、3＝非集团的活動的遊び、4＝非集团的非活動的遊びを指しているが、ここでは分析課題に基づ

いて3と4を統合して「非集団的遊び」とし、また回答項目5はごく少数であったため、分析から除外した。結局、子どもを、I型(集団的活動的遊びをしている子ども)、II型(集団的非活動的遊びをしている子ども)、III型(非集団的遊びをしている子ども)の3タイプに類型化し、友人観の差異を検討した(各タイプの人数は、表1以下を参照)。

いま、これら3タイプの属性を仮説的に提示すると、以下のようになる。

I型(集団的活動的遊びをしている子ども)

日頃から集団を形成して遊んでいるタイプであるから、友人関係の現状を肯定的に認識している。また、このタイプの遊びは活動的、すなわち、野球やサッカーといった特定の遊びの遂行を目的としているので、遊ぶ際にはある程度の人数が必要となってくる。だから、多様な種類の友人を広く志向するような態度を有している。こういうわけで、友人関係一般に対する評価は肯定的で、友人関係形成の欲求も高い。

II型(集団的非活動的遊びをしている子ども)

I型と同様に、日頃から集団を成して遊んでいるタイプであるから、友人関係の現状を肯定的に認識している。しかし、このタイプの遊びは非活動的、すなわち、友人との交流それ自体を目的としている。したがって、情緒的な結びつきを保持し得る友人を志向するような態度を有している。とはいえ、友人関係一般に対する評価は肯定的であり、友人関係形成の欲求も高い。

III型(非集団的遊びをしている子ども)

友人と集団を成して遊ぶことが少ないこのタイプは、友人との十分な相互作用機会がもてないから、友人関係の現状を否定的に認識している。そして、現状認識が否定的であるからこそ、友人を忌避するような態度を有しており、ゆえに友人関係一般に対する評価は低く、友人関係形成の欲求も低い。

一方、友人観の3つの側面それぞれに含まれる質問項目は下表のとおりである。

友人観の質問項目

友人関係に対する認識 あなたの友だちは、あなたのことを、どのくらい分かっていると思いますか あなたは、友だちのことを、どのくらい分かっていますか 友だちづきあいが面倒くさいと感じることが多い あなたは、友だちに好かれているかどうか気になりますか あなたは、いまの友だちとのつきあいに、満足していますか
友人関係に対する態度 遊んだり、おしゃべりをするのは、気の合う人とだけだ 何をするかによって、一緒に行動する友だちがちがう
友人関係に対する評価と欲求 友だちといより一人の方が好きなことができよ べつに友だちがほしいとは思わない

III 調査結果の分析

友人観の分析に入る前に、各タイプの基本的属性、すなわち友人数について見ておきましょう。先に提示した仮説にしたがうならば、友人数はI型とII型、取り分けI型で多く、III型で少ないのではなかろうか。

表1は、家の近くでいつも一緒に遊んだり話をしたりする友人数を示したものであるが、友人数は確かにI型>II型>III型の順で多くなっている。すなわち、集団的活動的遊びをしているI型は、特定の遊びを遂行するためにある程度の人数が必要となるので、関係を取り結ぶ友人数はそれだけ多くなる。一方、集団的非活動的遊びをしているII型は、友人との交流それ自体を目的としているから、I型のように多くの友人を必要とはしない。したがって、同じ集団的遊びをしているII型であっても、その友人数はI型よりも少なくなる。そして、III型は日頃から友人との集団的遊びをしていないのだから、友人数は最も少ないのである。

表1 家の近くでいつも一緒に遊んだり話をしたりする友人数

	いない	1-4人	5-9人	10-14人	15人以上	合計
I型	5.5 (20)	20.9 (76)	20.9 (76)	12.1 (44)	40.6 (147)	100.0 (363)
II型	8.0 (61)	32.5 (250)	24.7 (189)	14.0 (107)	20.8 (159)	100.0 (766)
III型	12.7 (29)	35.1 (80)	22.4 (51)	11.8 (27)	18.0 (41)	100.0 (228)
全体	8.1 (110)	29.9 (406)	23.3 (316)	13.1 (178)	25.6 (347)	100.0 (1357)

p<.01

注1) 数値は%、括弧内は実数。以下同様。

注2) 無回答・不明は除く。以下同様。

注3) I型=集団的活動的遊びをしている子ども

II型=集団的非活動的遊びをしている子ども

III型=非集団的遊びをしている子ども

今日では子どもの友人数の減少が各方面において指摘されているが、子どもの日頃の遊びを軸として見てみると、その友人数も決して一様ではなく、集団的遊びをしている子どもほど、また活動的遊びをしている子どもほど多く、タイプによって差異が見られるのである。

1 友人関係に対する認識

それでは、本題の友人観を分析していくが、友人観の3つの側面のうち、いまの友人関係に対する認識から見ていくとしよう。

表2と表3はそれぞれ、自分に対する友人の理解度、友人に対する自分の理解度を示し

たものである。全体では、いずれの項目においても9割以上が「分かっている」と回答しており、友人との相互理解度は高いとする子どもが大半を占めている。しかし、これをタイプ別に見ると、有意な差が認められた。すなわち、自分に対する友人の理解度、友人に対する自分の理解度いずれにおいても、「分かっている」との比率はI型・II型で高く、III型で低い。日頃、非集団的な遊びをしているIII型で比率が低いのは、このタイプが友人と相互に理解し合うに十分な相互作用の機会をもちあわせていないからであろう。一方、日頃から集団を成して遊んでいるI型・II型は、そうした機会を十分にもっているから理解度が高いのだといえる。

表2 あなたの友だちは、あなたのことを、どのくらい分かっていると思いますか

	分かっている	分かっていない	合計
I 型	94.3 (383)	5.7 (23)	100.0 (406)
II 型	93.7 (787)	6.3 (53)	100.0 (840)
III 型	84.9 (208)	15.1 (37)	100.0 (245)
全 体	92.4 (1378)	7.6 (113)	100.0 (1491)

p<.01

注1) 分かっている=とてもよく分かっている+だいたい分かっている
 分かっていない=あまり分かっていない+ぜんぜん分かってこない

注2) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
 II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
 III型=非集団的遊びをしている子ども

表3 あなたは、友だちのことを、どのくらい分かっていますか

	分かっている	分かっていない	合計
I 型	95.4 (391)	4.6 (19)	100.0 (410)
II 型	94.0 (792)	6.0 (51)	100.0 (843)
III 型	89.1 (221)	10.9 (27)	100.0 (248)
全 体	93.5 (1404)	6.5 (97)	100.0 (1501)

p<.01

注1) 分かっている=とてもよく分かっている+だいたい分かっている
 分かっていない=あまり分かっていない+ぜんぜん分かっていない

注2) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
 II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
 III型=非集団的遊びをしている子ども

したがって、友人関係に面倒臭さと感じている程度もタイプによって異なっている。全体的傾向をまず見ると、表4より、友だちづきあいを面倒臭いと感じることが多い(=「はい」と回答した比率は約1割とごく少数であり、先に見た理解度(「分かっている」が9

割以上)を反映しているといえよう。しかし、これをタイプ別に見ると、その比率はI型・II型で低く、III型で高い(有意差あり)。このように、III型で友人関係を面倒臭いと感じているのは、自分に対する友人の理解度、友人に対する自分の理解度がともに低く、それだけに良好な関係を保持し得ない場合が多々あるからであろう。

表4 友だちづきあいが面倒臭いと感じることが多い

	はい	いいえ	合計
I 型	8.9 (36)	91.1 (369)	100.0 (405)
II 型	10.5 (88)	89.5 (754)	100.0 (842)
III 型	17.8 (44)	82.2 (203)	100.0 (247)
全 体	11.2 (168)	88.8 (1326)	100.0 (1494)

p<.01

注) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
 II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
 III型=非集団的遊びをしている子ども

次に、友人に好かれているかどうかが見てみると、表5より、全体では約半数が「はい」(=気になる)と回答している。しかし、これもタイプ別に見ると有意差が認められ、「はい」の比率はII型で最も高く、I型で最も低かった。この点は、どのように解釈することができるだろうか。集団的非活動的遊びをしているII型で比率が高いのは、このタイプの遊びが友人との交流それ自体を目的としているからであり、だからこそ、遊び相手である友人が自分に対して好意的な感情を抱いてくれているかどうかは、取り分け重要性を帯びてくることになる。一方、I型で比率が低いのは、このタイプの遊びが特定の遊びの遂行を目的としているからであり、彼らにとって重要なのは、自分への友人のまなざしよりも、もっばらいかにして当該遊びを遂行していくかということなのである。

表5 あなたは、友だちに好かれているかどうか気になりますか

	はい	いいえ	合計
I 型	45.0 (184)	55.0 (225)	100.0 (409)
II 型	54.9 (463)	45.1 (380)	100.0 (843)
III 型	46.3 (114)	53.7 (132)	100.0 (246)
全 体	50.8 (761)	49.2 (737)	100.0 (1498)

p<.01

注) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
 II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
 III型=非集団的遊びをしている子ども

こういうわけで、最後に、いまの友人関係に対する満足の有無を見てみると(表6)、全体では、先に見たように約半数が友人に好かれているかどうかという不安を抱いてはいるものの、8割を超える子どもが満足している(=「はい」)と回答している。総じて、満足度は高いといえよう。しかし、これもタイプ別に見ると、I型>II型>III型の順で満足しているとの比率は高く、タイプによって差が見られる(有意差あり)。I型で満足度が高いのは、友人との相互理解度が高く、友人関係にわずらわしさを感じることもなく、友人に好かれているかが気にかかることもないからであり、対照的に、III型で満足度が低いのは、友人との相互理解度が低く、友人関係を面倒臭いと感じているからである。そして、友人との相互理解度が高いにもかかわらず、II型の満足度がI型よりも低いのは、友人に好かれているかどうか気になるという点での両者の差異が反映されているのではなかろうか。

表6 あなたは、いまの友だちづきあいに満足していますか

	はい	いいえ	合計
I 型	88.2 (360)	11.8 (48)	100.0 (408)
II 型	84.3 (709)	15.7 (132)	100.0 (841)
III 型	74.6 (185)	25.4 (63)	100.0 (248)
全体	83.8 (1254)	16.2 (243)	100.0 (1497)

p<.01

注) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
 II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
 III型=非集団的遊びをしている子ども

2 友人関係に対する態度

それでは、次に、友人関係に対する態度の様相を見ていくとしよう。

まず一つに、友人関係を形成するにあたり、子どもたちはどのような態度で臨んでいるのだろうか。表7より、遊ぶのは気の合う人とだけだ(=「はい」)とする比率を見てみると、全体では約4割を示している。友人と相互に理解し合っていると認識している一方、友人に好かれているかどうか不安に思っている状況を反映しているといえようか。これをタイプ別に見ると、気の合う人とだけ遊ぶとする傾向は、III型>II型>I型の順で強くなっている(有意差あり)。III型においてこのように選択的に友人関係を形成しようとする傾向が強いのは、このタイプが友人関係の現状を否定的に認識し、満足できていないからであり、だからこそ、仮に一緒に遊ぶのであれば良好な関係が取り結べるよう、気の合う人とだけと遊びたいと考えるのであろう。対照的に、I型は相手を選び好みしない、いわばオープンな友人関係を形成しようとする傾向が強いが、それは野球やサッカーなどの遊びを遂

行すべく、ある程度の人数を確保しなければならないからであり、また、現にそうした関係を取り結んでいる現状に満足しているからである。そして、友人関係の現状を肯定的に認識してはいるものの、I型よりもII型において気の合う人とだけ遊ぼうとする傾向が強いのは、このタイプが友人との情緒的交流を目的としているからであり、だからこそ相互に理解し合えるような、親密になれるような友人を選択しようとするのではなかろうか。

表7 遊んだり、おしゃべりをするのは、気の合う人とだけだ

	はい	いいえ	合計
I 型	35.9 (147)	64.1 (263)	100.0 (410)
II 型	43.6 (367)	56.4 (475)	100.0 (842)
III 型	57.6 (141)	42.4 (104)	100.0 (245)
全体	43.8 (655)	56.2 (842)	100.0 (1497)

p<.01

注) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
III型=非集団的遊びをしている子ども

関連して、表8より、何をするかによって一緒に行動する友だちがちがうか否かを見てみると、全体では約3割がちがう(=「はい」と回答しているが、これをタイプ別に見ると、その比率はIII型で最も高く、II型で最も低い(有意差あり)。先述のように、III型は、友人関係に対する否定的な現状認識のゆえに選択的に友人関係を形成しようとする傾向にあるが、関係を形成した後にあっても、わずらわしさを避けるべく、行おうとする行動内容に適した相手を選択しつつ、その相手と一緒に行動しようとするわけである。一方、II型は、遊びを通して友人との交流を図ることが目的だから、どのような行動ないし遊びの内容であろうと、それをある一定の固定的なメンバーと一緒に行動しようとする。また、III型

表8 何をするかによって、一緒に行動する友だちがちがう

	はい	いいえ	合計
I 型	35.0 (142)	65.0 (264)	100.0 (406)
II 型	30.2 (254)	69.8 (587)	100.0 (841)
III 型	40.2 (98)	59.8 (146)	100.0 (244)
全体	33.1 (494)	66.9 (997)	100.0 (1491)

p<.01

注) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
III型=非集団的遊びをしている子ども

ほどではないが、それに次いでI型で比率が高かったのは、このタイプの目的が特定の遊びの遂行にあるだけに、その遊びができるだけスムーズに進行していくように、それぞれの遊びを得意とする友人と一緒に行動しようとするからであろう。

3 友人関係に対する評価・欲求

では、最後に、子どもたちが友人関係一般に対してどのような評価をし、どのような欲求をもっているのかを見てみよう。

表9は、友だちというよりも一人でいる方が好きなことができてよいと思うかという、友人関係一般に対する評価を示したものである。全体では、約15%の子どもが「はい」と回答し、一人でいる方がよいとの否定的な評価をしているが、これをタイプ別に見ると、その比率はIII型で高く、I型・II型で低かった(有意差あり)。すなわち、集団的な遊びをしている子どもほど友人関係はよいものだと肯定的に評価し、非集団的な遊びをしている子どもほど一人の方がよいと否定的に評価しているわけである。この結果は、先に見た友人関係に対する認識や態度についての諸結果から容易に推測されよう。

表9 友だちというより一人でいる方が好きなことができてよい

	はい	いいえ	合計
I 型	11.2 (46)	88.8 (363)	100.0 (409)
II 型	11.5 (97)	88.5 (743)	100.0 (840)
III 型	31.7 (77)	68.3 (166)	100.0 (243)
全 体	14.7 (220)	85.3 (1272)	100.0 (1492)

p<.01

注) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
 II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
 III型=非集団的遊びをしている子ども

したがって、友人関係に対する欲求についての項目、すなわち、べつに友だちがほしいとは思わないとの問いに対しても、表10から明らかなように、「はい」(=ほしいとは思わない)の比率はIII型において高く、I型・II型では低いのである。

表 10 ベつに友だちがほしいとは思わない

	は い	いいえ	合 計
I 型	2.9 (12)	97.1 (396)	100.0 (408)
II 型	3.9 (33)	96.1 (811)	100.0 (844)
III 型	7.3 (18)	92.7 (229)	100.0 (247)
全 体	4.2 (63)	95.8 (1436)	100.0 (1499)

p<.05

注) I型=集団的活動的遊びをしている子ども
 II型=集団的非活動的遊びをしている子ども
 III型=非集団的遊びをしている子ども

IV 要約と結論

本研究では、子どもの友人観の今日的様相を遊びとの関連から明らかにすべく、子どもをI型(集団的活動的遊びをしている子ども)、II型(集団的非活動的遊びをしている子ども)、III型(非集団的遊びをしている子ども)の3タイプに類型化し、タイプ間における友人観の差異を比較検討した。

分析結果のまとめとして、ここに小学生(但し、4年生および6年生)がもつ友人観の全体的傾向、および遊びを軸に類型化したそれぞれのタイプの子どもがもつ友人観を特徴的に記述すると、以下ようになる。

小学生の友人観の全体的傾向

9割以上の子どもが友人は自分を理解してくれている、また自分は友人を理解していると認識しており、友人関係を面倒臭いと感じているのは1割にとどまる。その一方で、半数の子どもが友人に好かれているかどうか気になっているものの、8割は友人関係に対して満足しており、友人関係に対する現状認識は総じて肯定的であるといえる。だが、友人関係形成にあたっては4割の子どもが気の合う人とだけ遊ぶとし、行動内容によって一緒になる友人が異なるとする子どもも3割を超える。ともあれ、8割の子どもは一人より友人という方がよいと友人関係を肯定的に評価し、友人はいらないと友人関係形成を忌避するものは1割に満たない。

I型(集団的活動的遊びをしている子ども)

友人は自分を理解してくれている、また自分は友人を理解しているとの認識が高く、友人関係を面倒臭いとは感じていない。友人に好かれているかどうかも気にかけておらず、友人関係に対する満足度は高い。また、気の合う人に限らず、幅広く遊ぶ友人を求める傾向にある。そして、一人より友人という方がよいと友人関係を肯定的に評価して

おり、友人関係形成への欲求も高い。

II型（集団的非活動的遊びをしている子ども）

友人は自分を理解してくれている、また自分は友人を理解しているとの認識が高く、友人関係を面倒臭いとは感じていない。だが、友人に好かれているかどうかとの不安を抱えている。また、何をするにも同じ友人と行動をとともにする傾向にある。ともあれ、I型と同様に、一人より友人といる方がよいと友人関係を肯定的に評価しており、友人関係形成への欲求も高い。

III型（非集団的遊びをしている子ども）

友人は自分を理解してくれている、また自分は友人を理解しているとの認識が低く、友人関係を面倒臭いと感じている。だから、友人関係に対する満足度は低い。それだけに、友人関係形成にあたっては気の合う人だけを選択しようとし、また内容に応じて一緒に行動する友人が異なる傾向にある。友人といるより一人でいる方がよいと友人関係を否定的に評価しており、友人関係形成への欲求は低い。

こういうわけで、子どもが有する友人観も、当該子どもの日常的な遊びの形態によって異なることが明らかとなった。結論的にいえば、以下のごとくである。

- (1) 集団的遊びをしている子どもは、そうでない子ども（＝非集団的遊びをしている子ども）よりも、友人関係に対する認識、態度、評価・欲求のいずれの側面においても肯定的な友人観を有している
- (2) 同じ集団的遊びをしている子どもであっても、活動的遊びをしている子どもは、そうでない子ども（＝非活動的遊びをしている子ども）よりも、友人関係に対する認識や態度の側面において肯定的な友人観を有している

したがって、児童期の子どもにとっての集団的遊びの重要性が、ここに示されたわけである。冒頭でも述べたように、児童期の子どもが積極的に友人関係を形成し、そこでの他人性の経験を通して自己中心性から脱却していくことは、彼らが現実の社会生活に適應していくための準備段階としてきわめて重要である。そして、友人関係を積極的に形成していくためには友人観は肯定的でなければならないが、そうした友人観は集団的遊びを通して形成されることが明らかとなった（結論(1)から）。また、現実の社会生活に適應していくための準備段階という意味では、他人性の経験はできるだけ多様であった方が望ましいが、そうした多様な他人性の経験は、同じ集団的遊びのなかでも、取り分け活動的遊びを通して経験されるわけである（結論(2)から）。

注

- (1) 住田正樹「地域社会に生きる子供」松原治郎編著『地域の復権』学陽書房、1980年31～73頁
- (2) 住田は、子どもの仲間集団を、ある特定の遊戯活動を目的として形成される「活動集団」と親密な仲間との相互活動や相互交渉を目的として形成される「交友集団」の2つのタイプに類型化し、その内部構造と相互作用過程を詳細に分析している。住田正樹『子どもの仲間集団の研究』第2版、九州大学出版会、2000年
- (3) 学年不明が2名いるため、各学年の有効回収票数の合計は全体の有効回収票数に一致しない。
- (4) 質問紙では、調査対象者が理解容易なように「友だち」という表現を用いた。本文においては、友人と友だちとは互換的に用いている。

【付記】本研究は科学研究費補助金基盤研究(A)(1)「子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在」(平成10～12年度)(代表：住田正樹)の調査の一部である。